

What ISIT?

ISIT : Institute of Systems & Information Technologies/KYUSHU

新研究所長ごあいさつ

研究所長 牛島 和夫

長田初代所長の後をうけて第2代所長に就任しました。

本研究所の開設は1995年12月に遡ります。わが国のインターネットの普及が立ち上がった年です。それ以来、情報技術の進展は目覚しいものがありました。

その5年間に長田所長には本研究所の基礎を固め、行くべき方向を定めるという大業を果たされました。

IT(情報技術)という言葉がマスコミで日々的に取り上げられるようになったのは、2000年4月森首相の就任演説が最初です。本研究所の名前に情報技術がつけられているのはご承知のとおりです。時代に先んじていたことをご理解いただければ幸いです。

産学連携の進展、ベンチャービジネスの興隆、地域の情報関連産業の振興に、情報技術の深化と発展、適切な適用が鍵になります。本研究所の活動と存在とがその源泉となり、触媒となって貢献できることを願っています。

ご支援・ご鞭撻のほどをお願いいたします。



プロフィール	1963年 3月	東京大学大学院数物系研究科修士課程修了
	同年 4月	九州大学講師(工学部)
	1971年 12月	九州大学助教授(工学部)
	1977年 12月	九州大学教授(工学部)
	1990年 4月	九州大学大型計算機センター長 併任
	1996年 5月	九州大学教授(大学院システム情報科学研究科)
	同年 同月	九州大学 大学院システム情報科学研究科長 併任
	2001年 4月	九州システム情報技術研究所長 九州大学名誉教授 工学博士

新室長ごあいさつ

第1研究室長 村上 和彰

(九州大学教授・ISIT兼任)

このたび第1研究室をお預かりすることになりました。

第1研究室では、前任の安浦室長のとき同様、今後の電子機器の心臓部として益々その重要性が高まりつつある「システムLSI」に関する諸技術の研究開発を進めて参ります。

特に、研究室活動のミッションを次の3つ、すなわち、(1)地場企業からのニーズの高い「アプリケーション・スペシフィック・プロセッサ」の共同研究開発、(2)SpecC等の新たなシステムLSI設計環境に関する研究ならびに国内企業へのコンサルティング、そして、(3)システムLSI

の開発手法そのものを大きく革新する可能性を秘めた「動的システム検証／最適化」技術に関する基礎研究、に定めその研究成果を広く社会に移転していく予定です。

今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。



プロフィール	1984年 3月	京都大学大学院修士課程修了
	同年 4月	富士通(株)入社
	1987年 4月	九州大学助手
	1994年 6月	九州大学助教授
	2000年 8月	九州大学教授(システム情報科学研究院)
	2001年 4月	九州システム情報技術研究所 第1研究室長 兼務 博士(工学)

九州ギガポップ(QGPOP)シンポジウム

～動き出した九州の高速広域ネットワーク～

[3月8日]

九州ギガポッププロジェクトでは地域の産学官が連携し、共同研究開発活動を支援するネットワークインフラを整備しました。国内外の高速通信研究開発型バックボーンと接続して高速インターネット技術や高度アプリケーションに関する研究開発を進めています。

インターネットに対する新しい試みや各自治体及び各企業の展望について、将来のインターネット技術に興味を持つ方々と一緒に意見交換を行い、将来に向けて私たちが取り組まなければならない問題をそれぞれの視点から検討する機会として「九州ギガポップシンポジウム2001」を開催し、375名の皆様に参加いただきました。

(以下、敬称略。お名前は発表順です。)

■「九州ギガポッププロジェクトの概要」

- ・荒木 啓二郎
(QGPOP代表, ISIT第2研究室長, 九州大学教授)
- ・平原 正樹 (ISIT)・堀 良彰 (九州芸術工科大学助手, ISIT特別研究員)
- ・岡村 耕二 (九州大学助教授, ISIT特別研究員)

九州ギガポッププロジェクト(QGPOP)

- ・次世代研究開発型インターネット
- ・新インターネット機能提供 (QoS, IPv6, マルチキャスト, IPSEC, モバイル)
- ・高速、ブロードバンド、常時、グローバル
- ・産官学連携の共同研究開発インフラ
- ・開発環境の共有=研究コミュニティー
- ・国際研究インターネットの一員

TAO@JGN公募利用プロジェクト (JGN-P12543)
<http://www.qgpop.net/>

荒木 地域産学官連携と共同研究開発を支援するネットワーク研究のためのネットワークインフラを整備・提供します。

組織の垣根を超えたネットワークを研究開発の基盤として整備し、みんなで共有して先進的研究を行うものであり、若い研究者、技術者にワクワクするような場を提供することで技術の進展に寄与して行きたいです。

活動のひとつとして7月の世界水泳大会福岡2001において会場とQGPOPを結んで

先進的インターネット技術の実践的実証実験を行う予定です。

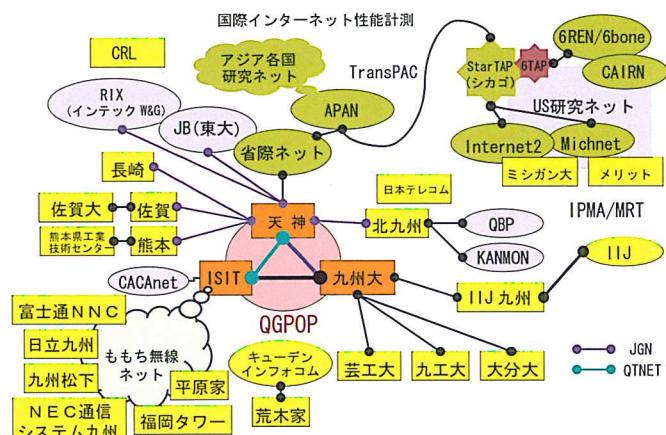
平原 九州・福岡に住んでいて国際的・先進的な研究ができるかと考えていました。地域のインターネット研究者で共有できれば、例えば福岡に誕生するベンチャー企業がQGPOPにアクセスすることで大学とも共同研究ができるようになります。

堀 コアネットワークは産学官の連携に最適な構成としています。ISITは主に企業との

連携のために、また九州大学は大学を中心とするアカデミックな組織のネットワーク構築の実績を踏まえて活動し、天神は現在の通信事業者並びに日本を縦断するネットワークとの接続を容易にするキャリアのハウジングとなります。

岡村 QGPOPを使って高度情報処理を織り込んだ遠隔会議のデモンストレーションとして、北九州市から参加します。

九州ギガポッププロジェクトおよび連携研究プロジェクト



■セッション1 「動きだした九州地区自治体ネットワーク」

○コーディネーター **問題提起「自治体のIT化とその意義」**

○パネラー

- 「豊の国ハイパーネットワーク」
[NetComさが推進事業の現状と商用化]
「やまぐち情報スーパーネットワーク」
「ふくおかギガビットハイウェイ」

篠崎 彰彦 (九州大学 助教授)

宇津宮 孝一 (大分大学教授)

西村 龍一郎 (ネットコムさが推進協議会 事務局長)

松野 浩嗣 (山口大学 助教授)

溝江 言彦 (福岡県企画振興部 情報企画監)

篠崎 IT施策は走りながら考えていくという特徴があり、時間、空間さらには組織を超えて情報や頭脳が行き交う環境が大切です。



篠崎 彰彦 氏

従来の公共事業とは異なり、整備構想ではなく自治体がどのように利用し参加していくかという「効果(Out Come)」を織り込んだ利用構想を持つ必要があります。より良いサービスによって税金を節約し、大きな経済主体として電子調達などを進め、地元企業のIT化を促進するきっかけ作りが大切です。

そのためには、例えば地域における知の拠点である学校を組織の枠を超えて活用する等、内部の組織改革を断行し、同時に積極的アウトソーシングによって需要を創出して、若い人たちが起業できるようなシーズ・環境作りが大切です。

■「豊の国ハイパーネットワーク」

大分県庁から県内6つの圏域に放射状に延伸する光ファイバー網を主体とする基幹ネットワーク。(平成15年度整備完了目途)

宇津宮 利用構想検討に当たっては、県内施設のヒアリングを行うことで利用者サイドの要望の反映に努めています。

過疎地を抱える人口120万程度の地方の地域で事業化させるためには、まず県内全域

でデジタルデバイドを解消する必要があり、そのためにも家庭から大容量ネットワークへ直接接続できるように、ADSLによるファーストワンマイル構築などの検討を急いでいます。

■「NetComさが推進

事業の現状と商用化】

<http://www.netcom.gr.jp/>

県内4局CATV放送網をTCP/IPデータ通信に転用したネットワーク。県庁内ネットワークや学校インターネット網等と相互接続して運用実験中。(平成13年4月完全商用化目途)



宇津宮 孝一 氏

(次ページへづく)

西村 2年半ほど前、県下の世帯普及率が43.7%というCATV網を活用して、ITと産業振興を効率的に結び付ける観点からスタートしました。

通信手段としてもまずはIPだけを試みることからスタートしました。

今ではユーザーがブロードバンドの特性を活かして設計図・写真のやり取りを始める等、非常に自然な企業活動のひとつとして利用でています。

4月よりディストリビューション部分を商用化しますが、今後1年でユーザーが自由に使えるサービス部分も整備します。

■「やまぐち情報スーパーネットワーク」

山口市と県内15のアクセスポイントを光ファイバー網で結ぶ幹線ネットワーク(YSN)。

(平成13年7月運用開始目途)

<http://www.pref.yamaguchi.jp/>



西村 龍一郎 氏

松野 足まわりは基本的にひかず、オープンネットワーク(無料)で、ローカルプロバイダーと接続する地域IX(Internet eXchange)を設置することにより、足回りの線をひく業者を逆に誘導できないかと考えています。

ネットワーク構築に先駆けてアプリケーション開発に着手し、1998年以降6つのプロジェクトが動いています。

例えば、30Mbpsの回線を整備して周辺の病院から山口大学医学部へレンタルゲン写真を送って診断する遠隔医療実験などです。また、教育分野では島の小学校がYSNを使って街の小学校と結び実験教室ができました。ネットワークによって、距離の壁を超えたのです。

今年度から通信事業者のネットワークとの接続共同実験を開始し、国内外への通話が半額



松野 浩嗣 氏

程度で利用できるインターネット電話VOIPの実験も予定しています。

■「ふくおかギガビットハイウェイ」

県内7都市(福岡、北九州、飯塚、久留米、直方、田川、大牟田)のアクセスポイントを光ファイバー網で接続する基幹ネットワーク(FGH)。

(平成13年11月供用開始目途)

溝江 アクセスポイント及び光ファイバーネットワークは用件を満たす事業者の施設設備を借上げて構成します。インターネット接続回線の他、東京等都市圏との直接接続回線を確保し、研究活動などの広域化等に活かします。

福岡・北九州では足回りのサービスも考えられます。FGHがブロードバンドの起爆剤となり、他の地方都市にも同じようなサービスの展開を誘導することができるかどうかを地方5都市で見極めます。



溝江 言彦 氏

■セッション2 「企業の考える常時広域インターネット接続」

○コーディネーター 問題提起

○パネラー

「企業における地域インターネットの位置付けとその展望」

江崎 浩(東京大学 助教授)

「インターネットの高速化試験の実施状況」

永田 成樹(九州電力(株)電子通信部 課長)

「ブロードバンド無線インターネットアクセス」

真野 浩(ルート(株)代表取締役社長)

「ブロードバンド時代のIIGグループの取り組み」

浅羽 登志也((株)インターネットイニシアティブ 取締役)

「日本テレコムのブロードバンドアクセス」

堀家 里雄(日本テレコム(株)九州支社長)

「高速インターネット時代の日立のネットワークビジネス」

原川 竹氏(日立製作所 ネットワークアウトソーシング本部長)

「インターネット端末最新動向」

是久 洋一(九州松下電器(株)開発研究所長)

江崎 多くのインターネット関係者は、今後電話、放送など全てがインターネットになると考えています。また、有線か無線LANのどちらで勝負をかけるかの分かれ目にきています。



江崎 浩 氏

地域に於けるインターネットは企業の考える常時広域インターネット接続においてどういう位置付けにあり、どのように展開すべきなのでしょうか。

■「インターネットの高速化試験の実施状況」

電力既存のインフラを活用したアクセス系インターネット高速化試験。低圧配電線方式と無線LAN方式の実験中。(平成13年3月 終了目途)

永田 一般住宅で2.4GHz帯、11Mbpsの標準的無線LANを試験中で、1~2Mbpsの高速通信を確保しています。



永田 成樹 氏

低圧配電線方式は家庭内のどのコンセントからも信号の送受信が可能で、新しいインフラ整備が必要です。

高速通信のための技術的課題として、信号と同じ10~450kHz帯における家電機器から発生する雑音対策を新たに施しており、現在1Mbpsを確保できる見通しです。

ファーストワンマイルについてはまだ結論はありませんが、電力会社の資源である光ファイバー、低圧配電線及び無線を活用して、通信速度1.5Mbps程度で、定額制の常時接続を目指します。

福岡在住者として、QGPOPの活動に新しいコンテンツを期待しています。

■「ブロードバンド無線インターネットアクセス」

無線によるファーストワンマイル/ワイアレスブロードバンドシステムの開発。加入者系無線アクセスシステム(WLL)、広域移動アクセスシステム(光ファイバー、CATVとのインターフェース)など

真野 無線の場合、周波数が保護されない、使用範囲が限定されるなどの規制を受けます。有線系のものとうまく融合して利用価値が生まれ、集合住宅など有線では困難なところだけ無線という形を推奨します。地域における光ファイバー利用はまだまだであり、光ファイバー及びCATVとのインターフェースとして無線に安価でドロップするシステムを開発しました。

ブロードバンドはアプリケーションがあつてはじめて活かされるもので、特にノンPCなコンテンツが大切です。家庭のブロードバンド

接続はPCやキーボードだけではなく、体重計やいろんなものでしょう。さらに安い無線LANカードにセキュリティと認証技術さえ取り込めば、街中でももっと自由なサービスになります。地域網においてあらゆるアプリケーションの恩恵を享受するためには屋外でも高速インターネットにつながる状況を2003年頃までに構築する必要があります。

QGPOPには、東京ではない、九州という地域での独自な取組みに期待します。

■「ブロードバンド時代のIIGグループの取り組み」

インフラ・ネットワーカー・サービス・アプリケーションビジネスを展開。テラビット級の全国基幹バックボーン。(2005年頃実現目途)

浅羽 5年後主要なバックボーンは65.6Gbpsが必要と試算されます。今年度中に10Gbps、来年度40Gbpsが製品化でき、その上は研究室レベルです。そこでIIJは10Gbps × 176波多重によるテラビット級の光ケーブルバックボーンをまず平成13年度に東名阪に実現させ、平成14年度福岡、2005年頃までに全国基幹網の完成を目指します。将来のネットワークは最終的にデータセンターが相互にクロスウェーブの大容量インフラで接続されると考えられ、全国のコンテンツを集めるハブとしての



浅羽 登志也 氏

(次ページへつづく)

データセンターが必要になり、福岡を含め6ヶ所のデータセンターを稼働予定です。

アクセス網は可能なところは光を展開し、その他はDSLや他を連携してIIJのバックボーンで束ね、データセンターにつなぐ物理的ネットワークを構築します。その上でネットワークサービスを展開し、各種コンテンツを各地のデータセンターからディストリビューションする取り組みを展開します。

QGPOPの活動によりコンテンツが充実し、インフラをいかに使いこなせるかを示してくれる期待しています。

■「日本テレコムのブロードバンドアクセス」

バックボーン、アクセス系、ソリューションビジネスを展開。JDSLの九州地区サービスイン。(4月福岡・北九州市、以降順次県庁所在地)沖縄での2.4GHz帯無線LAN常時接続サービス。(今年早期に沖縄)

堀家 コンピュータの処理能力アップとキャリア基幹網整備が進む反面、ファーストワンマイル、ボトルネックのギャップが拡大しており、アクセス系の高速化にも取り組んでいます。



堀家 里雄 氏

最近の市場には主要業務以外の業務(ネットワーク利用業務など)をアウトソーシングして本業に回帰する動向があり、ネットワークマネージメントサービスを展開します。

真のブロードバンドサービスに向け研究中のものとしてユーザーへの波長貸しサービスがあります。ユーザーが自由に帯域を変えられ、ATM、専用回線、ISDN等を問われないオンデマンドサービスが可能になります。

インターネット上のデータは日々増殖していて、特にデータトラフィックが幾何級数的に増加しています。知識情報という血液がブロードバンドという血管の中で非常に速いスピードで動いています。

百道浜に人々が情報を持ち寄り、新しい知恵が誕生することを期待します。

■「高速インターネット時代の日立のネットワークビジネス」

高速ネットワークを支えるギガビットルータGR2000・ルータネットワークシステム開発。ネットワークサービス事業「ネットワークサービスCubium」(昨年9月)。日本初のIPv6インターネットデータセンター試行(全国5拠点)。

原川 IPv6の技術をいち早く製品化したギガビットルータGR2000は、ユーザーサイドからバックボーンシステムまで、高速、高性能を実現し、さらにテラビットクラスの開発を目指します。

ネットワーク利用における当社の実ビジネスノウハウをお客さまへ提供するネットワークサービス(Cubium)事業として、データセンターなどのインフラサービスやネットコミュニティーサービスなどECサイト提供のサービスなどを進めます。

企業ネットワークアウトソーシングサービス(Compassport)では、キャリアからお客様のルータシステムまで日立が運用までを提供します。さらに3月末までに社内ネットワークをIPv6によるIPネットワークとVoIPネットワークに切り替え、エンドユーザーにギガ速度のサービスを提供し、社内で



原川 竹氏 氏

の利用を併せた超高速バックボーンネットワーク構想を進めます。

今後、利用サイドの活用を期待します。

■「インターネット端末最新動向」

主たる事業はアナログインフラ上の通信機器の開発・販売。今後のインターネットを中心とするインフラの流れに対応すべく、新しい端末事業に取り組む。

是久 CEショーでも今後のインターネットアプライアンスの拡大を感じます。例えば、電源を入れると自動的にインターネット上のいろんなサイトから情報を取り込んでくる「3COM／オーデリー」という端末があります。ユーザーはチャンネルを回して好きなところをのぞくだけであり、いつの間にか意識せずにインターネット上の情報を即座に見ることができるというコンセプトのものです。



是久 洋一 氏

今後の方向はブロードバンドを前提とした常時接続、定額料金、使いっぱなしでしょうし、その上でアプリケーションがどんどんリッチになっていくためには、①プラットホームがリッチになること。②高齢者向けなど単機能端末やメンテナンスまで含めた簡単な加入者契約システム作り。③テクニカルオリエンテッド、実利、使いやすさの追求が必要になるでしょう。

QGPOPネットワークは気持ち良く生活するための社会のインフラとして育ってほしいです。

Report 2

◆第11回海外研究交流講演会 (1月11日)

『三次元距離画像の融合による物体形状自動モーテリング』

北京大学で物体形状の三次元モーテリング技術について研究されている査紅彬教授を招いて、第3研究室との海外研究交流を行いました。



地域企業の皆さんにも参加いただいた講演会では、今特に注目されている距離画像系列の取得方法、多重解像度三次元モデル記述及び物体形状の複雑さにあわせたモーテリングのための動的解像度制御などについて研究の成果を紹介いただきました。

また、中国のITブームについても紹介があり、ベンチャー企業が活躍する裏側で基礎開発力の不足を心配されました。さらに、査教授は昨年秋まで九州大学大学院システム情報科学研究院で活躍しておられたこともあり、地理的に緊密な関係にある日本に対して、単なる技術支援ではなく同じアジアの国同士の特色ある共同研究の実施を期待されました。

Report 3

◆海外研究交流 (2月2日~3日)

「第4回Joint Workshop on System Development」

JWSDは日本と韓国の研究者、技術者がシステム開発におけるモデル化、システムアーキテクチャ、設計、ツール、環境、方法論などに関する国際研究会で、ISIT、SEA(ソフトウェア技術者協会)及びPOSTECH(浦項工科大学、韓国)の共催で実施しています。今回が日本ではじめて、福岡での開催となり、韓国からはPOSTECHをはじめKAIST、Sogang 大学から15名、日本からは九州大学をはじめとする大学と企業から24名、総勢39名が参加しました。



(ワークショップの模様)



(発表中の織田研究員)

2日にわたる研究発表では非常にダイナミックな研究論議が行われ、IT花盛りの中でシステム開発技術に関する堅実な姿勢が印象的でした。

また、若い研究者達は、屋台でのアフターワークショッピングでも大いに語りあうなど、親睦の広がりも実感できた2日間でした。

来年は韓国の太田での開催です。

Report 4

◆第14回ISIT技術セミナー（1月29日） 『ソフトウェアプロセス改善』

今回は過去のセミナーご参加の多くの皆さまからご要望のありましたテーマを取り上げました。

第1部は名古屋市工業研究所電子情報部の小川 清氏に、「ソフトウェアプロセスの標準化とアセッサの能力」と題して、プロセス改善およびソフトウェア（システム）の調達を行う際のプロセス評価を行う専門家としてのアセッサの能力の重要性と現実の課題などについてご説明いただきました。

第2部は日本電気株式会社Eラーニング事業部の込山後博氏に、「NECにおけるソフトウェアプロセス評価改善への取り組み」と題して、グループ全体で成果をあげているNECのソフトウェアプロセス評価改善活動の経緯、開発手法、適用実績をもとに、取り組みに当たってのノウハウや参考事例を紹介いただきました。

プロセス評価改善を効率よく実行するためには改善のための鍵を探りあて、評価し、評価結果を判断できる経験と能力を持つ人の存在が重要であり、また効果を上げるために長期にわたり継続的に取り組める体制と相応の投資が必要であるため、経営層のコミットメントが不可欠です。



Report 5

■IPA成果発表展示会

東京ドームホテルプリズムホール
(2月14日)

・『QoSマルチキャスト機能を活用するインターネットTVとVoDシステムのためのアプリケーション開発』 ・『集合住宅における次世代コミュニケーションの実証実験』

IPA(情報処理振興事業協会)の成果発表展示会があり、平成12年度に終了した上記の2件について、共同提案者である九州大学坂本氏及び株式会社シティアスコム様と共同で展示出品を行ないました。

成果発表展示会は盛況を博しISITの展示ブースにも多数の来訪者がいました。『QoS～』の展示ブースでは、RSVPやマルチキャスト機能を利用した動画配信の技術の高さに注目が集まり、関連する技術的質問も数多く、本開発の新規性、技術水準の高さに关心が集まりました。また、『集合住宅～』の展示ブースにおいては、インターネットマンションにおけるマンション内部のコミュニケーションツールとしての実証実験の結果に、マンション販売会社等ソフトウェア関連会社以外の来客者も多くあり、会場内でも注目を集めました。



『集合住宅～』展示ブースの模様

平成13年度 事業計画

情報関連技術の研究開発を通じ、地域の関連企業における技術開発力を高めることに寄与することを新規事業の創出を直接的、間接的に推進すると共に、行政機関等と協力して健全な情報社会の構築に努め、地域社会の発展に貢献することを目指しています。

地域に開かれた役に立つ研究所として、平成13年度は以下の事業計画に基づいて各種活動を展開してまいります。

1. 研究開発

(1) 定常型研究

定常型研究はISITの基幹となる事業であり、有用性の高い研究を中心長期的観点から推進していきます。

◆ 第1研究室

- ・アプリケーション・スペシフィック・プロセッサーに係る研究開発
- ・SpecC等の新たなシステムLSI設計環境に関する研究開発
- ・「動的システム検証／最適化」技術に係わる基礎研究
- ・計算機教育手法の研究開発および研究成果の普及

◆ 第2研究室

- ・系統的なソフトウェア開発環境に係る研究開発
- ・マルチメディア通信ネットワーク技術の実用化（モバイルインターネットなど）に係る研究開発
- ・ネットワークによる地域コミュニティ形成と社会活動支援に係る研究開発
- ・キーワード利用傾向に基づく発想的検索支援
- ・国際インターネット性能計測に関する研究

◆ 第3研究室

- ・騒音環境における音声認識技術に関する研究開発
- ・実環境適応型ネットワーク情報マシンの研究開発
- ・情景分析のための画像処理及び音響処理法に関する研究開発

(2) プロジェクト型研究・受託研究

- ・地域の企業や大学との連携のもと、それぞれの研究開発資源を活かして国からの受託プロジェクトなどの推進や新たな提案を積極的に行って行きます。
- ・九州ギガポッププロジェクト
- ・騒音下音声認識技術に関する研究

(3) 共同研究

- ・大学やISITの研究シーズを活かして、地域の企業などのニーズに応えるため、有用性の高い共同研究を積極的に行っていきます。
- ・システムLSIワーキンググループ
- ・地域型電子認証技術に関する研究
- ・ヒューマンライフ情報技術研究会

2. 内外関係機関との交流・協力事業

- ・定期交流会の開催（年6回）
- ・国内外研究機関との交流会等の開催
- ・交流研究員の受け入れ
- ・連携大学院協定の推進

3. コンサルティング

- ・窓口相談
- ・電話、FAX、電子メールによる相談
- ・研究アドバイザーへの紹介

4. 情報の収集及び提供

- ・広報誌の発行（年4回、季刊）
- ・活動報告書の発行（年1回）
- ・インターネットホームページによる情報提供
- ・マルチメディア市民講座の開催（年1回）

5. 人材育成

- ・企業技術者受入
- ・研究員等受入（定常型研究従事研究員、交流研究員等）
- ・OJT研修（地域の情報関連企業からの技術者等の受入れ）
- ・技術セミナーの開催（年3回）
- ・地域の情報関連企業・団体等が実施する研修への支援
- ・若手研究者の育成



ISIT賛助会員様一覧

平成13年3月末現在
(五十音順、敬称略)

日頃より格別の御支援を賜り、御礼申し上げます。

■法人会員(66社)

(株)アクセス	西銀コンピューターサービス(株)
(財)アジア太平洋センター	(株)西日本銀行
イーエヌジー(株)	西日本鉄道(株)
伊藤忠テクノソリューションズ(株)	西日本電信電話(株)
(株)インターネットイニシアティブ	日本システムスタディ(株)
(株)SRA九州	日本電気(株)
(株)FCCテクノ	日本電気テレコムシステム(株)
(株)エクシーズ	ネクストコム(株)
(株)エヌ・ティ・ティ・データ	(株)羽野製作所
(株)エル・エス・アイ	(株)日立製作所
(株)オーニシ	(株)日立超LSIシステムズ
小野電機(株)	(財)福岡観光コンベンションビューロー
(株)オリズン	(株)福岡機器製作所
(株)九州システム・アカデミー	(株)福岡銀行
九州通信ネットワーク(株)	福岡コミュニケーション放送(株)
九州電力(株)	(株)福岡シティ銀行
九州日本電気ソフトウェア(株)	(株)福岡ソフトリサーチパーク
九州日本電気通信システム(株)	(社)福岡貿易会
九州ビジネス(株)	福博総合印刷(株)
九州松下電器(株)	富士通(株)
九州旅客鉄道(株)	富士通デバイス(株)
(株)九電工	マイクロコード(株)
行政システム九州(株)	松下電器産業(株)
ケア・ルートサービス(株)	ミノルタオフィスシステム九州(株)
(株)コンピューター利用技術研究所	三菱電機(株)
(株)コンピュータコンビニエンス	三菱電機インフォメーションシステムズ(株)
西部瓦斯(株)	(株)三森屋
(株)サンコー・テクノ	(株)ももちネット
(株)シティアスコム	(株)ロジカルプロダクト
(株)昭和電気研究所	(株)ロジック・リサーチ
新日本製鐵(株)	
(株)正興電機製作所	
(株)ソワコーポレーション	
田熊プラント(株)	
(株)東芝	
(株)ドミックスコーポレーション	

■個人会員(14名)

合庭 俊悟	木下 潔紀	中島 一隆
大内 高志	桑山 雅行	橋本 淳
岡部 秀夫	是永 哲也	堀内 勉
甲斐 康司	砂田 八郎	柳 善博
岸田 孝一	張 漢明	



ご来訪の皆さま

平成13年3月末現在
(敬称略)

貴重な情報交換、誠にありがとうございました。

●平成12年12月以降の主なご来訪者

月/日	団体名	[人]
12/ 4	福岡商工会議所 商工会議所マネジメント研修	15
12/19	SRP地区福岡市長視察	5
2/20	テレトビア促進協議会 関東ブロック	9
2/23	地方シンクタンク協議会 九州・沖縄ブロック	16
3/ 1	かずさアカデミアパーク研究所等立地推進協議会	14
3/16	大韓民国 環黄海圏代表団	29
3/16	中華人民共和国 汎黄海地区代表団	30
3/21	釜山市産業振興課及び釜山Software支援Centre	3

3月末までに、13団体、198名の方にお会いました。



ISITドメイン名変更のお知らせ

この度、ISITのドメイン名を変更しました。

・新ドメイン名 isit.or.jp

・旧ドメイン名 k-isit.or.jp

新ドメイン名 isit.or.jp は5月から運用開始しております。

皆様には大変お手数をおかけいたしますが、お手元のアドレス帳、ブックマーク等に登録がございましたら、k-isit.or.jpをisit.or.jpへ変更いただきますようご協力をお願いいたします。

旧ドメイン名は7月末まで利用いただけますが、8月以降はご使用になれませんのでご注意下さい。

ISITのホームページ <http://www.isit.or.jp/>



新スタッフ紹介

所 属	・ 役 職	氏 名
研 究 所	長	牛 島 和 夫
第 1 研 究 室	長	村 上 和 彰
第 1 研 究 室	研 究 員	富 山 宏 之
總 務 部	部 長 代 理	加 茂 篤 篤
總 務 部	部	黒 川 妙 子
	〃	岩 崎 富 士 美
第 1 研 究 室	研 究 助 手	門 前 淳
第 2 研 究 室	研 究 助 手	西 原 慎
第 3 研 究 室	特 別 研 究 員	菅 野 穎 盛
第 3 研 究 室	研 究 助 手	浜 崎 陽 一 郎

ISITの総勢は40名です。

●発 行

財團法人 九州システム情報技術研究所

Institute of Systems & Information Technologies/KYUSHU

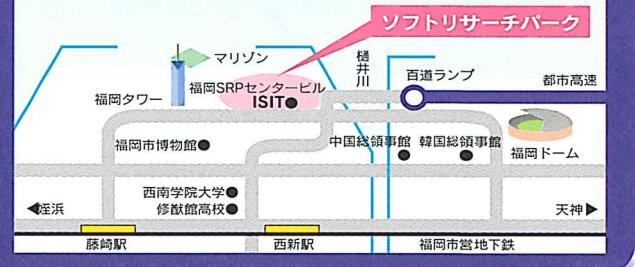
〒814-0001 福岡市早良区百道浜2丁目1-22-707(福岡SRPセンタービル7F)

Fukuoka SRP Center Building 7F 2-1-22, Momochihama, Sawara-ku, Fukuoka City 814-0001

TEL 092-852-3450 FAX 092-852-3455

URL : <http://www.isit.or.jp> E-mail : koryu@isit.or.jp

印刷: (株)ドミックスコーポレーション



古紙配合率40%再生紙を
使用しています



ISIT新賛助会員様

賛助会へのご加入、誠にありがとうございます。

■法人会員

株式会社 西日本高速印刷 様

■個人会員 (五十音順)

小宮 宏道 様
近藤 直史 様

(全法人会員数:66社)

(全個人会員数:16名)



賛助会員ご加入のおすすめ

会員の皆さまのための特典を充実しました。

■賛助会員の特典

- 1 ISITが主催する定期交流会(年6回)、技術セミナー(年3回)等に無料で参加できます。
- 2 ISITが行う情報技術に関する技術コンサルティングを割引料金で利用できます。
- 3 ISITが発行する広報誌「What IS IT?」(年4回)や研究報告書等の刊行物の配布が受けられます。
- 4 ISITが保管する情報技術関係資料等の閲覧ができます。

■賛助会費

年会費 法人会員 1口 6万円
個人会員 1口 1万円

入会についてのお問い合わせは総務部までお願いいたします。

Tel:092-852-3450 担当:加茂、金丸